

とはいえ2年間勉強して、新婚旅行でフランス語圏のブリュッセル、パリをそぞろ歩いてはみたものの、人々が何を話しているのか全く分からなかった、その程度のものです。

オルセーに行ったら、2人組の老姉妹がなにやら私達のほうに近づいてくるので、一瞬硬直しましたが、なぜだかやさしく英語で話し掛けてくれました。それ以来フランスには行っていません。(オルセーは休館日でした。)

<その二: Harry Potter と phonics>

この原稿を書いている週末には3作目、ハリー・ポッターとアズカバンの囚人が公開となる。混雑が嫌いなので当分行かないと思うが、映画館で見るのが楽しみである。最初は子供の映画、と相手にしていなかったが、家族で1, 2作を映画館で見て、正直はまってしまった。子供達の成長振りがなんともかわいらしく、また、たのもしく感じられる。

インターネット上でスクリプトを公開しているサイトを見つけ、両方のスクリプトをダウンロードし、しばらく通勤時間を利用して、何度も聞いていた。スクリプトに関しては、学生の頃 Back to the future にもはまったことがあり、M J Focks のハスキーな声を楽しみつつ英語の勉強にもしていた。

Harry Potter はイギリス英語なので発音や言い回しなどが米語と違い面白い(品がある?)と感じる。海外の学会に行くと色々な国の人が色々な発音で英語を話しており、Japanese English もそのひとつ。日本で耳にする英語は殆どがアメリカ中西部の英語であるように思える。スペクトラムの広さを理解するのも有効ではなからうか。

音に関して一番感心したのは4歳になる子供。その年齢なのでアルファベットという概念がなく、音で捕らえるしかない彼女は、家族の誰よりも発音が上手になった。特にロンのまねが上手で、ハーマイオニー気取りの長女とよく英語で遊んでいる。幼稚園の帰りに外国人に英語を習っているが、その教授法は技術的には phonics というらしく、その発音を聞いていると必ずしも外国に住まなくてもよいのだと確信させられる。オーストラリア出身の先生なので、ややもすると a の音が"アイ"に変わりがちなのが気になるが。

<その三: 飲み物・食べ物>

外国を旅行して一番困るのが食べ物。まさかいつもマクドナルドというわけにも行かない(なぜ世界中どこに行ってもあるのか?)。たまには美味しいものを、とレストランに入るのであるが、メニューが分からない、分量も分からない。よく知っている人についていくのが一番安心であるが。

その1・ビール。シカゴで飲んだ黒ビールは本当に美味しかった。ミシガン湖のほとりに立つと、VI Warshawski のセンチメンタル・シカゴ(サラ・パレツキー)の気分。ビールは味的にはギネス(アイルランド)が割と近いように感じるが、もう一段上のようにも思える。注文の時は dark beer で、ビールについてはいうまでもなく英国も美味しい。カウンターに行くと様々なサーバがあって選ぶのに困るが、日本の味に一番近いのは Lager というタイプ。グラスの大きさについては SI 単位系をまるで無視した pint がいかにも面白い。これと fish & chips の組み合わせは定番(美味しいとは言いません)。

その2・ボローニャ。最も古い大学(ボローニャ大学)のあるイタリアの中世都市。一方でファッションとグルメの街でもある。いろいろ食べ歩こうと考えては見たものの、英語のメニューにもチンプンカンプンなのであるから、イタリア語ならまして、オーストリアの先生から行く前に、Fungi と言えば分かるといわれ、恐る恐る注文。Fungi は菌

類のことであるが、きのこ料理を指す。ポルチーニ茸(Fungi Porcini)が有名であるが決して安くはないのでご注意ください(味は確かに良い)。

その3・オーストラリアのカプチーノ。Flat White と言い、地元の人は殆ど"フラホ"に近く発音するため最初は全く聞き取れなかった。コーヒーの上の泡の造り方に2種類あって、Flat White は蒸気を注入して作る方法(スチームタイプ)を採用しているのでも時間がたってもさめずに美味しく味わえることが特徴。この他にも色々ありますが、おなががすいてきたので、このあたりで失礼します。

編集長から頂いた高尚な題目が最後には諸国漫遊食べ放題になってしまったが、ご覧いただければ幸いです。ご意見・感想は筆者まで。

## 人との出会いをひらく言葉

伊藤 亜矢子

学生の頃、アルバイトで、ある心理学会の国際大会のお手伝いをしました。

1日目の受付業務。外国からの参加者が、掲示板の見慣れない日本語に、不安そうな顔で首をひねっています。「何が書いてあるの?」と唐突に英語で聞かれ、まずはにっこり。笑顔で応え(笑)、そして、当たらずとも遠からずの回答(しかできません)。そんな怪しい通訳なのに、ものすごくほっとした笑顔で感謝されました。

確かにハングルやイスラム文字など、見当もつかない掲示だらけだったら、不安になりますよね。そんなときには、片言の英語でも、ずいぶん役立つものだなと思いました。

そして次の日、今度はワークショップの会場係。じゃんけんで当たったのは、すでに亡くなられた歴史に残る臨床家の奥様のセッションです。一夜漬けて和英辞典をひき、「ご用がありましたら、なんなりとお申し付け下さい」と決まり文句の英語表現を暗記。コチコチになって挨拶すると、思いがけずニコリ笑顔で抱きしめられました。

そこまではよかったものの、続くセッションでは外国人と日本人の参加者が入り交じってのワークもありました。なかには、年輩の看護師さんなど、学生の私より英語に無縁な参加者もいます。そうなるも少しも分かる者が、にわか通訳です。文字通り冷や汗ものでしたが、それでも、自分の過去を遡るセッションで、オーストラリア人の心理療法家を母に見立て、幼い頃を遡るロールプレイをした年輩の日本人女性が(たどたどしすぎる私の通訳にも関わらず)、心理療法家の深い共感に、涙をはらはらと流しています。言葉や国境を超えたダイナミックな心理療法的アプローチの展開に驚くと同時に、わずかのキー・ワードでも、これだけ心をつなぐことができるのかと驚きました。言葉を超えたものが2人を動かし、しかしそこに言葉がなければ、その出会いもないのです。

学会中、「どこで英語を覚えたのか」と外国人参加者に聞かれ「公立の中学と高校」と答えると、「日本の英語教育はそんなに優れているのか」と驚かれました。「?」と、思わず言葉につまりましたが、確かに当時の私は、ごく普通の中学校と高校の授業で英語を学習しただけでした(ですから、みなさんもせつば詰まれば必ず英語が話せます!?日本の英語教育はすばらしい!?)。

とはいえ、当時の、おそらく今以上に読み書き中心だった英語教育では、まともに話せるわけはありません。それに比べて、街で出会う韓国や東南アジアからの観光客や留学生は、なんと英語をよく話すことか。やはり日本人は英語がとてつもなく苦手なのだ・・・そんな思いがずっとありました。

しかしそうした思いも、「誰だって、学習すればするだ

け英語を話せるようになるのだ」という確信に、いつのまにか変わりました。仕事上、読んだり書いたり、聞いたり話したり、生活のなかで英語を使っていると、誰でも英語にふれていなければならないほど、確実に話せるようになるのだなあ実感します。

例えばここ数年、どうしても会いたかった研究者が来日したり、海外で学会発表したり、何かと英語を話す機会がふえました。とはいえ、何もしなければ英語は上達しません。けれど、研究教育に育児。とても特別なことをする時間は今の私にはありません。一方、幼い我が子を見れば、ただ大人の会話を聞いているだけなのに、少しずつ少しずつ、毎日確実に、日本語が進歩しています。これはちょっと悔しい。考えてみれば、留学しても、そう長時間英語でおしゃべりするわけではないでしょう。語学習得ばかりに時間をかけてもいられないはずです。それでも英語が進歩するのは、数時間でも英語にふれ、何かにつけて英語を自己表現として使うから、話せるようになるわけです。

そこでお勧めしたいのは、毎日、英語を聴くことです。BGMのように英語を聞き流すだけの学習です。これならスイッチを押すだけで（家族には迷惑がられました）、とても簡単。いつもはBGMですが、パソコン作業で目がつかれたとき、気分転換したいとき、頭にいつもと違う刺激が欲しいときなど、ちょっとした瞬間には真剣に聴きます。どれだけ聴き取れるかをゲーム感覚で楽しむこともあります。そして使える表現があれば頭にしっかりインプット。確実に表現もふえるし、聴き取り能力もアップします。スイッチを押すだけで、聞けば聞くだけ確実に進歩するのです。成果は自分を裏切りません。単純ですが、これは馬鹿にできません。この年齢の私が、確実に効果を実感しますから、若い皆さんには絶対におすすめです。お茶大在学中に、英語がペラペラになるかもしれません！！

ところで昨年のこと。学会でアメリカのインディアンの住む田舎町まで約28時間もかけて行ってきました。日本人観光客などめったにない土地柄ですから、土産物屋でも居酒屋でも、日本人というだけで珍しがられるほどでした。世界各地からの参加者と交流し、夢のように楽しい数日間でした。そしていよいよ帰国の日。明け方3時頃、ホテルでチェックアウトし、迎えにくる空港までのバス（そんな時間に出発しないと飛行機に間に合わないほど田舎だったのです）をフロントで待っていた時のことです。誰もいないロビーで、チェックアウトしてくれたスペイン語まじりのフロント係の女性が、突然、まったくなまじりない日本語で、「ありがとうございます」と頭を下げるのです！まるで日本人のように。びっくりして、「パーフェクトな発音ですねえ、驚きました」と英語でいうと、「実は・・・」と思いがけない身の上話。

研究者である父親の転勤で、小学校入学まで日本に住んでいたこと。日本では温泉旅行など楽しい思い出しかないが、もはや「ありがとうございます」が唯一覚えている日本語であること。米国に帰国しても英語が全く話せなかったため、日本語と発音が似ているスペイン語をまず覚え、スペイン語から英語に転じたこと。最近の米国の経済事情や国際関係のまずさ。医療保険など社会保障の不十分な現状で、田舎暮らしはつねに健康の不安にさらされていること。貧しいこの街では、大学教員でさえも複数のアルバイトが必要なくらい経済が逼迫していること。幼い子を残して朝も夜も働いている無念さ厳しさ。それでも、拝みたくなくなるくらいすばらしい四季のうつろいのあるこの地を離れたくないこと、などなど。バスがなぜか大幅におくれたこともあって、ずいぶんと話し込みました。

ふりかえると彼女は、もう二度と会わないであろう偶然出会った「なつかしい日本」からの客人と2人きりになっ

た瞬間に、普段は誰にも語らない語れない思いの丈が、あふれてきたのかもしれない。同年配の子育て中の女性として、「抑圧」のなかを生きる女性として、思いがけなく出会った彼女のあふれるような思いは、忘れられないものでした。

心を動かすのは言葉を越えたものです。けれど、やはりそこに言葉がなければ、出会いの機会もありません。BGM学習の成果？で、普通の人の心の叫び、まさに肉声をじっくりと聞いたことは、さまざまなことを感じさせる印象深い体験でした。

言葉はコミュニケーションの道具です。道具は使えよう。使わなければ進歩もありません。使えば思いがけない出会いや視野の広がりが必ずあります。そして日本語でさえそうであるように、完璧な言語習得はなく、どこまでも奥の深い世界です。完璧はないのだから、足りない力は「度胸」と持てる「コミュニケーション能力」の総動員でカバーです。

学会で、ホテルで、街で、地元の人々や、紛争下の国などさまざまな国からの参加者と交流し、それぞれの肉声を聞いたことで、ますます言葉の大切さを感じるようになりました。同時に、なんだか英語だけではものたりなくなってきました。英語を話さない国もたくさんありますし、少しでも多くの言葉を話せたらそれだけ相互理解の範囲が広がります。最近では、ハンガリーやスペイン語、はるか昔ならフランス語など、いろいろな外国語のCDを「BGM」にしています。

最後に、私が感じる語学習得のコツ。できないと思ったら、語学習得は絶対できません。杓子定規に文法を考えながら言葉を話す人はいないので、難しい文法や何やらを無理に覚えようとはしない。あくまで必要に応じてマイペース。自分に必要なことから自然に覚えていけばいいのだと思います。（ちなみに、無謀な母親の私に、3歳でアメリカ人に預けられそうになった我が子は、必死に考えた末、「おしっこしたい」「のどかわいた」だけは英語で話せるようになりたいと真剣に練習していました（笑）。必要こそ最大の教師です！）。

「失敗は成功のもと」と考え、少々の間違いやできなさには目をつぶる。少しでも進歩すればそれでOK。努力は裏切りません。

お茶大生には幸い英語の基礎力があるはず。それはとても貴重なことです。あとは使おうとすること。目的をもって、練習に励むこと・・・あと〇〇年若かったら、もっと記憶力がよくなったのに！と日々思う私は、みなさんの可能性がもったいなくて仕方ありません。だまされたとって、今日から、BGM学習。おすすめします。

## 無口な人でも英会話がうまくなれる？

小林 哲幸

朝日新聞に「三枝の笑ウインドウ」というコーナーがあるのをご存じだろうか。毎週、読者から寄せられたちょっとした小話（笑品）がいくつか掲載され、それらについて落語家の桂三枝が評価を値段で表すコーナーである。結構笑えるものも多く、私が楽しみに読んでいるものの一つである。そこで最近、満額の評価をえたものが次の小話である。

“普段無口な父がミニ英会話番組を見ていた。講師が「一緒に発音してみましょう」と言うのに合わせて、父も声を出して発音練習をしているのを見て、母がボソッとつぶやいた。「英語より日本語で会話する練習して欲しいわ」”

かく言う私も家では無口な父で通っている。というのも、家族が総じておしゃべり好きなために、日常生活において